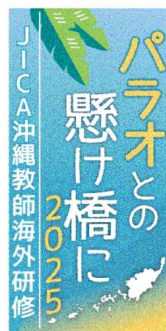




付録資料  
[ 新聞連載 ]

## 自然と調和豊かな生活



1

メインストリートに植えられたサトウキビ。住宅の庭から顔を出すバナナやパイアの木々。パラオ到着後、かつて沖縄の先人たちが移民してきた足跡をぼんやりと感じ、親近感を覚えた。

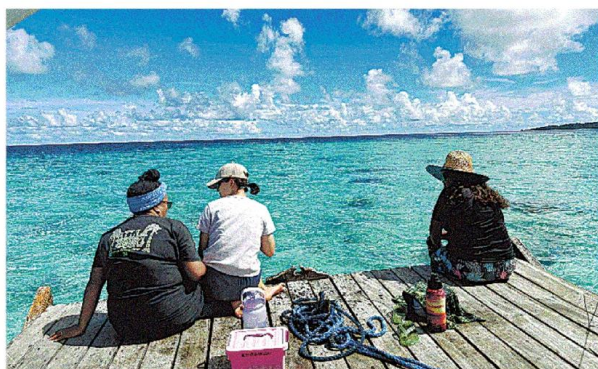
そこから一変、ニワール州エコツアーで目にしたのは「これがパラオだ!」と言わんばかりの巨大なマングロー



### 論教唯納恩

(平良中)

ブ。「この自然の雄大さや美しさをどのように伝えよう。宮古島のマングローブと比較したら生徒たちはどんな反応をするのだろう」。大迫力の自然を夢中でカメラに収めながら生徒たちの探究する姿を思い浮かべた。



ホームビジットで出かけた海。自然と共にある穏やかな時間が流れる＝8月9日、パラオ・ガラルド州

## 海の保全 沖縄と重なる

私たち外国人がパラオに入国する際には、パスポートにパラオ誓約の印が押され、自然に手を加えないことを約束する。

それほどに、この国の人々の自然に対する思いは強い。

リーフに囲まれた穏やかな海に船を浮かべ、陽気な音楽と共に、タピオカの伝統料理とその場で釣り上げた新鮮な魚をおかずには食事を囲む。フリーンダさん家族と過ごした海上での1日から、自然を愛し、環境と調和した彼女たちの生活の豊かさを肌で感じた。

一方で、国の経済的自立を目指し、多くの日本人の技術者たちがパラオの人々と信頼関係を築きながら、持続可能な観光開発に向けて奮闘している。

「多くの苦悩にも屈せず、異国の地で活躍している日本人やウチナンチュの声を生徒たちにも届けたい」私の胸

も熱くなった。

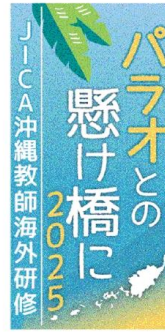
10日間の研修でパラオの魅力や課題を知れば知るほど、同じ島しょ環境である沖縄や宮古島が抱える問題と重ね合わせ、決して人ごとではないことに気付かされた日々。

「世界中につながる海を守るには」「自然環境と私たちの生活と両立させるためには」。帰国後も道端に落ちていたプラスチックごみを拾いながら考える。

「より多くの人が自分事として問題を捉え、アクションに至るにはどうしたらいいのか」。容易に答えが出せない問いに生徒たちと一緒に考え、挑み続けようと思う。

◆ ◆  
県内小中高の教師6人が8月1～12日、パラオを訪れて国際協力への理解を深めた。交流を通し、学んだことや感じたことを報告してもらう。(水曜日掲載)

# チムグクル感じ 胸熱く



2

遠い昔、大勢のウチナーンチュたちが海を渡り、異国の地パラオで生活を築いた。彼らがパラオで残したものは、サーターアンダギー（現地ではタマと呼ばれる）やポーク卵といった食べ物だけではない。



**具志堅優美子教諭**  
(県立宮古総合実業高)

ホームビジット先のタロイモ畑を紹介するハーソン先生(右)＝8月9日、パラオ・パベルダオブ島



日本の委任統治時代、日本本土からも多くの人々がパラオへ移住したが、パラオ人とウチナーンチュは特に仲が良かったという。ホームビジット

## 島しょ地域共通の問題も

トで温かく私たちを迎えてくれたハーソン先生(パラオアイメリーク小学校勤務)は、「オモイヤリ」をテーマにして授業をし、自分の畑で取れたタロイモを同じ地域に住む人たちへ分け与えていた。そんなユイマール精神とチムグクルにパラオと沖縄のつながりをじかに感じ、胸が熱くなった。

自然の食材を豊富に使ったパラオ伝統料理で満腹になった私たちに、愛情いっぱい「カメーカメー攻撃」で大盛りのフルーツとお弁当まで持たせてくれた。9日間のパラオでの研修中、多岐にわたる分野で活躍している現地のパラオ人や日本人の方々と出会い、彼らとの対話を通して多くの学びがあった。

パラオでの人口減少、人材

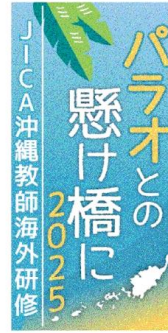
不足はどの分野においても直近の課題だ。

実際、パラオにいる人の約3分の1がパラオの外から来た人たちである。都会のコーロル市内では多国籍化が進み、農村部でのホームビジットの際にやっとパラオらしさや、パラオの伝統的な生活を体感することができた。

私が現在勤務している宮古島をはじめ、きつとどの島しょ地域でも同じようなことが起きていると思う。だからこそ日々関わっている生徒たちにも、この問題を自分ごととして考えてもらおうと思っただ。沖縄との深いつながりを感じることもできたパラオ。また絶対に足を運ぶつもりでいる。これから先もずっとパラオらしさが残る温かい島であってほしい。(水曜日掲載)

提供：沖縄タイムス社

# 自然や神話息づく社会



3

私はこれまで民俗学や神話、文化に関心を持ち、学びを続けてきた。今回のパラオ研修では、事前に関連書籍を読み、準備を整え、現地での体験を通じて知識と実感を結びつけることを意識し



## 宮里志織教諭 (八重山特支)

た。ペリリュー島に向かう船の上。海面は波一つなく鏡のよう空を映し、果てしない水平線が広がっていた。その光景は単なる自然の美しさにとどまらず、そこで生きてきた人々の歴史や精神性を感じさせ



自然と共に生きる人々の日常や願いが読み取れる伝統的建造物「バイ」 8月9日、パラオ・アイメリーク州

## 生きた営み 文化に継承

せるものだった。併せてペラウ国立博物館での展示内容が思い出され、パラオ人の世界観を全身で受け止めた瞬間だった。

アイメリーク州で見学した

伝統的建造物「バイ」は、周囲に自生する植物で建てられ、内部は鳥や魚などをモチーフとした文様が描かれていた。そこからは自然と共に生きる人々の日常や願いが読み取れた。さらに、パラオ高校の校章に神話由来のクモが採用されていることや、集落のおさがいる制度が現在も機能していることなどから、神話が過去の遺産にとどまらず、現代社会に息づく文化資産であることを確認できた。

また、口承で伝えられてきた神話を「ストーリーボード」

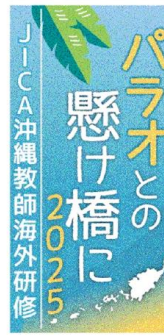
として後世に継承することに貢献した日本人の存在を知ったことは重要な発見だった。異文化理解と相互協力が文化保存において果たす役割の大きさを実感したのだ。

これらの学びを通じ、文化とは自然と人間の相互作用から生まれる生きた営みであると感じた。今後は文化の表層を伝えるだけでなく、その背景にある自然や歴史、人々の営みにも焦点を当て、子どもたちと共に地域の文化を掘り起こしていきたいと考えている。

その過程が子どもたちのアイデンティティを形づくる力になり、彼ら自身が文化を継承していく土台になると信じている。

(水曜日掲載)

# 探求心 国や文化超える



■ 4

教師だからこそできることはあるのだろうか…。教員4年目のこの夏、そんな問いを胸にパラオでの研修に参加した。「百聞は一見にしかず」ということわざを体感する日々であった。自然に触れ、温かい人々と出会い、そして伝



浦内桜教諭

## 浦内桜教諭 (恩納小)

統料理や建築物を通して文化を知った。  
沖縄と似ているその島国を好きになるのに時間はかからなかった。また自然があつて、人々がいて、文化があるから



出前授業を行う浦内桜教諭(奥) 〓8月6日、パラオ・アルモノグイ小学校

## 気付かされた教育の重み

こそ教育があるのだと気付かされた。そして教育があるからこそ自然が育ち、人々が育ち、文化が発展していく。このつながりに気付いた時、いわゆる「お勉強」だけではな教育の重みを再確認することができた。

今回、現地の小学校や高校を訪問し、授業を行ったり、高校の校長先生から話を聞いたりする機会があった。訪問した小学校では日本や沖縄の紹介をメインに授業を行った。パラオの子どもたちが興味津々で食いついてくれる様子を見て「知りたい、学びたい」という探究心は国や文化が異なっても変わらないのだと実感した。

一方、パラオ高校の校長先生は、若年層のスマホ依存や若者の国外流出、教員不

足といった課題について言及していた。沖縄を取り巻く課題と重なり、異国の地について学ぶ日々は、同時に沖縄について考える日々となった。

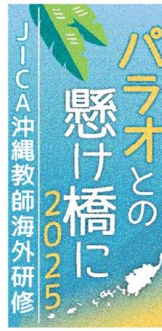
「百聞は一見にしかず」ということわざは後世になって続きが付け加えられた。「百見は一考にしかず、百考は一行にしかず」。「たくさん見るより一回考えた方がよい。たくさん考えるより一回行動した方がよい」という意味である。今回の研修では多くのことを「見て」「考える」機会を与えてもらった。

将来の変化を予測することが困難なこの時代を前に、まずは授業という「行動」を通して、子どもたちと共に未来をつくっていききたい。

(水曜日掲載)

提供：沖縄タイムス社

# 経済自立へ循環社会に



5

沖縄から約2200キロ南にある親日国の常夏パラオ。実際に行ってみると、自然がとても豊かで、人々の生活水準も高く、何でもそろっていた。また、日本が統治していた時代があり、沖縄からも多くの移民がいたため、言語や食べ



## 高山博明教諭 (名護高校)

物などさまざまなところでその名残を感じた。パラオの人口は約1万8千人で、労働者の6割が公務員という。主要産業は観光業だが、国の財政状況は厳しく、アメリカの経済援助によって支えられてい



現地職人のサポートを受け吹きガラス体験をする高山博明教諭(左) 11月8日、パラオのベラス・エコガラスセンター

## 言葉や文化継承に課題

る。

今回の研修では、JICAボランティアや日本のNGOの方々

な分野で活躍している日本人の方々の姿にとっても感動し、大きな刺激を受けた。

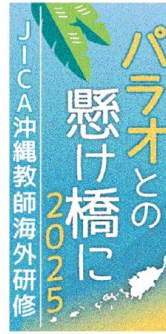
の方々が現地の人々と共に経済的自立に向けた、観光開発や産業化の取り組みの様子も実際に見ることができた。パラオは伝統的に環境保護の意識が強い。規制を緩和し観光開発につなげることは簡単ではないようだ。一方、ベラス・エコガラスセンターでは廃瓶からグラスやアクセサリを作ったり、廃プラスチックは軽油に変え工場の発電に生かしたりと「サーキュラーエコノミー」(循環経済)として確立しつつあった。

代表の藤さんは約20年かけてここまで成長させ、今後は現地の人たちだけで成り立たせるようにするという。パラオという異国の地でさまざまな分野で活躍している日本人の方々の姿にとっても感動し、大きな刺激を受けた。パラオの喫緊の課題として、人材不足やパラオ語の消失、伝統文化や戦争の記憶の継承などが挙げられる。沖縄にも共通していることだ。持続可能な観光開発、平和などをテーマに、「自分事」として捉え自分は何ができるかを生徒と一緒に探求していこうと思う。

(水曜日掲載)



私は沖縄が大好きだ。沖縄で生まれ育ったことに誇りを持っていて。そんな沖縄と切っても切り離せないのが「沖縄戦」だろう。私が勤務する小学校でも毎年6月になると平和教育の授業が行われる。大切な教育だと感じる一方



6

### 富山嘉孝教諭 (うるま市立与那城小)

戦没者慰霊の碑に手を合わせる  
富山嘉孝教諭＝8月9日、  
パラオ・ペリリュー島



その問いに向き合う手掛かりで、その伝え方に限界も感じていた。悲惨さや残酷さを伝えるだけで、本当に平和を学ぶことができるのだろうか。

# ペリリューの戦跡巡る

## 他者への共感と理解 実感

をパラオで得た。

皆さんはペリリュー島での戦闘をご存じだろうか。後の沖縄戦につながる戦いなのだが、その戦跡巡りツアーに参加させていただいた。沖縄戦以外の戦跡を巡るのは初めてで、島内各所に残る慰霊碑や戦車、大砲、司令部跡、地下壕などが当時の姿を今に伝えていた。国のために尽力してくれた祖先の方々に慰霊の思いを伝えながら地下壕を巡っていた時、同じ壕の向こう側にいた外国人観光客が陽気に手を振り、「ヘーイ！」と声をかけてきた。おそらく悪気はなかったのだろう。

た。そのきっかけは、その後訪れたアメリカ側の堂々とした記念碑である。彼らにとつては命を懸けて勝ち取った戦地なのだ。どちらが良い悪いではなく、一つの戦争にも複数の視点があり、それを知らなければ誤解やすれ違いが生まれる。平和教育の柱である「他者への共感と理解」の必要性を実感した。

パラオと沖縄は似ている。ヤマト世からアメリカ世、食文化の輸入、基地の存在、住民の多様性など多くの共通点がある。だが似ているからこそ、沖縄独自の文化が際立って感じられた。

外を見て内を知る。パラオでの学びが、改めて沖縄の良さを見つめ直すきっかけとなった。

(おわり)

提供：沖縄タイムス社

スタッフ

JICA沖縄 市民参加協力課

木田克人 田中知恵

JICAパラオ事務所

青木恒憲 井上栄

JOCA沖縄

伊藤丈和 我如古盛修、上原真紀

2025年度 JICA沖縄

# 教師海外研修 報告書&ワークショップ集

発行

2026年3月

発行者

独立行政法人国際協力機構 沖縄センター（JICA沖縄）

〒901-2552 沖縄県浦添市前田1143-1

TEL：098-876-6000/FAX：098-876-6014

研修実施団体

公益社団法人 青年海外協力協会沖縄事務所（JOCA沖縄）

〒904-0011 沖縄県沖縄市照屋1丁目15番4号

TEL：098-943-7801

